

第38回全国中学生人権作文コンテスト愛知県大会中日新聞社賞

女性と時代に色を

豊根村立豊根中学校 三年 清川 羽菜

人権。それは人間が人間として生まれながらにもっている権利のことである。そして生命・自由・平等なども関わってくる。私は今、

「この世界は平等です。」

と言われたら、すぐに否定するだろう。私の身の回り、日本という国全体で不平等というものが目に見えているのだから。

皆さんは、人命救助のために土俵に上がった女性が、土俵は女性が入ってはいけないという理由で土俵から下ろされたニュースを覚えているだろうか。私は鮮明に覚えている。同じ女性として悲しかった。正直、腹が立った。こんなことがあっても平等と言えるのか。

最近では、東京医科大学の一般入試で女子受験生を一律減点していた事実が明らかになった。これは女子受験生の合格者を抑えていたという事件である。この一律減点によって、今までたくさん勉強してきたのに、人の手によって努力が報われなかった人もいただろう。実力では手が届いていたのに仕組みで不合格だった人の思いを、学校側は考えたのだろうか。この二つの事件は人権を剥奪したといっても過言ではない。この事件を起こした人は知っているのだろうか。「人権は剥奪してはならない」ということを。

実際、私の身の回りでも男女差別というものが起きている。私が住む豊根村は人口千二百人の小さな村である。そんな豊根村には伝統の祭り、「花祭り」がある。豊根村では地区を三つに分け、三カ所で行われる。花祭りは一日中夜を徹して行われる。舞上げや鬼など三つの地区全て同じような舞をするのだが、私の住む下黒川区だけ、他の二地区と違うところが一つある。それは、「女性は舞ってはいけない」ということだ。それを知ったとき、私は悲しくて、悔しくてたまらなかった。保育園の頃から花祭りが大好きで二人の弟と遊びで舞っていたからだ。弟は舞えるのにどうして私は舞えないの？他の地区に住む同級生の女の子は舞えるのにどうして私は舞えないの？そんな思いが私の頭の中を駆け巡った。でも、私は舞うことを諦めたくはなかった。体を動かすことが大好きで、花祭りも大好きな私は、とても小さな希望を捨てなかった。

また、同じ頃に神様を女性が扱ってはいけないことを知った。私の家でも、神棚へのお供えを祖母が用意し祖父が供える。女性だと頼りないということか。そう考えるととても腹が立った。花祭りも神様のことも伝統とはいえ、差別にあたってしまうと私は考える。昔から伝わってきているものを受け継いで、守っていくことも大切なことだと思う。しかし、それだけではどうにもならない世の中なのだ。人口が減少し、時代が変化する中で、「伝統」というものを変えていく必要があると思う。時代にはその時代の色があつてほしい。

花祭りでは少し変化が現れた気がする。それは一つの噂からだ。

「女性も舞っていいことにするかもしれない。」

それを聞いたときとても嬉しかった。あの時捨てなかった希望が少し大きくなった気がした。女性が舞うことはいまだに実現していない。あの噂もデマだったかもしれない。それ

でも、不平等がなくなることを願って私は希望を捨てないと心に決めた。

私は今年、平等世界というものに初めて足を踏み入れたような気がした。

私は今年の五月から新城ベアーズという野球チームに入った。新城ベアーズは一つ上の先輩が初めての女の子だったそうだ。しかし、監督は女の子だからとは断らず、男の子と同じ練習メニューをこなさせたのだ。もちろんそれは私も同じだ。男の子と同じメニューで練習させてもらっている。それは私にとってとても幸せなことだ。体力は少し差があり正直大変だと思うことは多い。しかし、男の子と同じという男女の差がないことが私にとっては一番ありがたい。それが私の望んでいた世界だったからだ。監督やコーチは女の子が入ったことで、やりにくいところがあったと思う。それでも男の子と変わらないように教えてくれる。監督やコーチには感謝の気持ちでいっぱいだ。私は新城ベアーズに入ってよかったと心から思う。

私はこの世の中が新城ベアーズのように、男女関係なく、お互いに気持ちがよい生活を送れるようになってほしい。「平等」という言葉がどれだけ大切なのが分かる人が一人でも多くいてほしい。女性は「汚れ」。そう言われてきたことが最近はずいぶん変わりつつある。しかし、今でも「汚れ」という昔のなごりはある。それを全て排除するまで「平等」とは言ってはいけないと私は思う。それは女性として生まれてきただけで否定されているのと同じだと思うからだ。

辞書によると、平等とは、「かたよりや差別がなく、すべてのものが一様で等しいこと」だそうだ。本当に世界は平等なのか。私はもう一度見直した方が良いと思う。